



誰もが驚き言葉を失い、そして辛く悲しい年の始まりであった。令和6年能登半島地震で亡くなられた方々に哀悼の意を捧げるとともに、被災され避難生活で多くの困難に向き合われている方々にも心からお見舞い申し上げたい。また、現地で精神科医療を守り奮闘を続ける先生方や、過酷な条件のなかで被災された方々に寄り添うDPATスタッフに、衷心より敬意を表したい。

災害に遭遇するたびに人と自然の関係を考えさせられ、そして思い返す言葉がある。2011年3月に奈良市で開催された学術集会で、興福寺貫首のお話を伺う機会があった。「私は地球にやさしいという言葉が好きではありません。自然と人とは友達関係ではない、自然は畏れ敬うものです」と説かれていた。そして、直後の3月11日に東日本大震災が発生した。人は決して自然と対等なんかではなく、人知で想像もつかないようなことが起こりうることを思い知らされ、貫首の言葉は私の胸により深く深く刻み込まれた。

ある種の父性の一方で、すべての生き物そして人類を包み込み育む母性も、自然のもう1つの顔である。自然の豊かな恵みを享受しなければ生物は生存できず、そして食物連鎖の一部でもある。そうした営みのなかで、食い散らかされたり、やりっ放しにされたりしたものの後始末も、自然は引き受けてくれていた。人は自然に随分と甘えてきたものだが、それなりに分をわきまえ感謝を忘れずに長い間やってきたようにも思われる。しかし、いつの頃からか、自然は対等な友達なのではないかと勘違いしはじめた。畏れる対象ではなく支配できるとすら考える思い上がりのなかで、自然は人の後始末や尻拭いを放棄し始めているように思える。

精神科早期介入の領域では、「閾値」を超えた精神疾患の顕在発症を未然に防ぐことが重要なテーマの1つである。閾値（threshold）とは、ある一線を越えると急に異なる反応や出力が現れたり、物の形や質が変わってしまったりするような非線形性の変化における、その境界である。下敷きに力を加えてたわんでも元に戻る（力に対して比例性的変化）が、あるところでパキンと割れてしまうのにも似ている。

人の営みに対する自然の後始末や尻拭いは、まさに閾値を超えてお手上げになりつつある。毎日出される膨大なゴミの排出がすぐに想起されるし、加えて近年のマイクロプラスチックなど、問題は量的にも質的にも後戻りできなくなっている。自然は物を朽ち腐らせることにより、生き物が暮らす場を整えてきた。土を掘り返し多くの小さな虫や菌類をみるとそれがよくわかる。一方で、印字から10年20年以上前のものと思いきビニール袋やプラスチック製品も、彼らに分解されることなく土に交じって一緒によく出てくる。朽ち腐ることは一見醜いかもしれないが尊いものであるとつくづく感じるのである。

近年、あらゆる情報は電子化され、一瞬で消えてなくなるリスクもない訳ではないが、半永久的に残っていくであろう。刻々と折り重なっていく情報は、人の処理能力の閾値を超えて、もはや人が自ら後始末や尻拭いできない彼方に向かって、想像のつかない一人歩きをしていきそうだ。情報過多の時代に、残すに恥じないものを書くためにも、そして、吟味し選択する編集作業に携わるからには、一層の鍛錬を日々重ねていかねばと身の引き締まる年の初めである。

根本隆洋